

Sports

注目のデビュー戦は TKO負け

会計士女子プロボクサー
高木千愛さん

深澤理事長、友人らが声援送る

公認会計士の資格を持つ中央大学商学部3年の高木千愛(ちあき)さん=ワタナベジム=が、11月18日夜、東京・後樂園ホールでプロボクシングのデビュー戦(50kg契約4回戦=1回2分)に臨み、2回1分13秒、TKO負けした。



深澤理事長(前列中央)らがリングサイドで応援した



49・8キロ	矢吹純	▽女子4回戦
(協栄)	2回1分13秒	TKO
		高木千愛
49・9キロ	(ワタナベ)	

右が高木選手、左が矢吹選手

異色のキャリアとあって、試合前からマスコミの関心を集めていた。NHK、テレビ朝日、共同通信、時事通信、朝日新聞、読売新聞、東京中日スポーツ、デイリースポーツなど。試合日のリングサイドにも新聞・テレビ局の記者、カメラマンがずらりと並んだ。

後楽園ホールはボクシングの聖地。高校野球の甲子園のような存在という。

パンチの応酬

高木選手は赤コーナー。対する青コーナーは剣道出身の矢吹純さん(23)＝協栄ジム。ともに9月のプロテストに合格した。2人ともサウスポーだ。

午後6時、ゴングが鳴った。学生ながらプロとしてのデビュー戦。歴史の扉が開いた。週6日、朝は10kmランニング。夕刻からジムで始める猛練習の成果を出すときだ。ステップを踏み、リズムを取る。スキあらばパンチを繰り出す。

序盤は左ストレートを繰り出し、駆けつけた深澤武久・中大理事長らを沸かせた。パンチの応酬があり、やや気負いが見られたところ、相手の左パンチがさく裂した。鼻を強く打たれたようで、尻もちをついた。鼻から鮮血が流れ落ちている。白いトランクスが血に染まる。

第1ラウンド終了。コーナーに戻っ



第1Rが終わって、セコンド(左)にアドバイスを受ける

た。セコンドやリング下からの熱いアドバイスに笑顔で応えて第2ラウンドへ。

果敢に攻めたが、1分過ぎに連打を浴びた。レフェリーが止めに入ってTKO負け。レフェリーが立ちふさがったときだ。“なんで”というような表情を見せた。ファイトは衰えて

いなかった。女子ボクシングは危険回避、健康管理のため、ストップが男子より早いという。

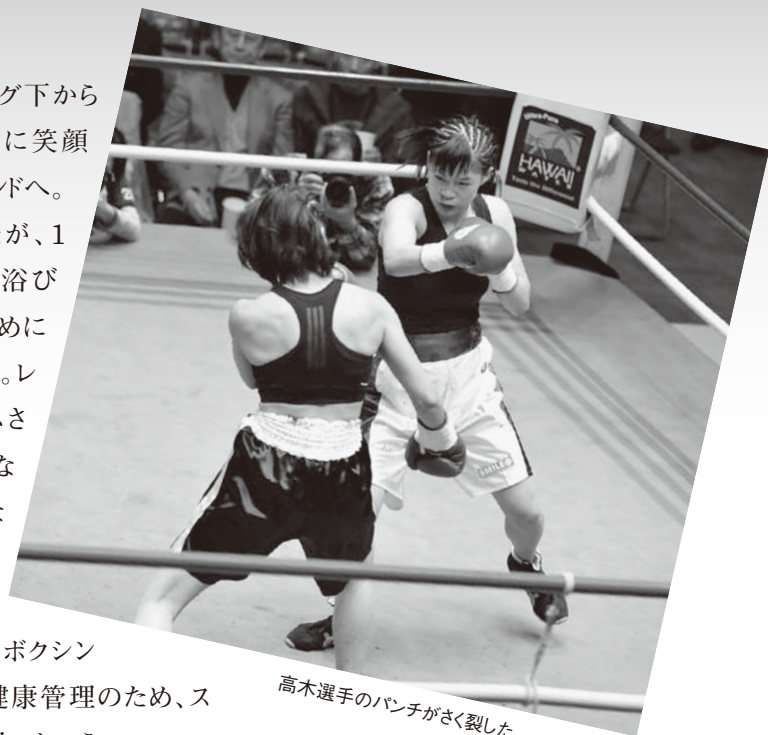
「緊張はしなかったです。練習したことができなかった。応援してくれた人たちに勝利を報告できずに残念です。これからも会計士の勉強とボクシングを続けていきたい」

ボクサーとして話す娘を初めて見たのが母・君子さん(48)だ。岐阜から急ぎ駆けつけた。高木さんは母に告げずにボクシングを始めていた。「言えば反対されます。子供が殴られるのは見たくないでしょう」。20歳になれば親の承諾なしに競技が始められる。「中途半端になりたくない」と誓って、20歳までに公認会計士の資格取得を目指した。競技開始は受験が終わってからだ。

母は「心配ですけど、応援します。一番の理解者として」と話した。鼻血には鷹揚だった。「小さいときから鼻血を出していて、勉強中やお風呂に入っているときも」

スタンドには公認会計士受験勉強をともにした友人8人が陣取った。「カッコいいですよ。驚きました」と三輪仁弥さん。県立岐阜商高時代からの仲間である。「彼女のおかげでボクシングをナマで見ました」

試合翌日の19日、高木さんは所属するワタナベジムへ行った。ジム会長



高木選手のパンチがさく裂した



試合終了後、健闘をたたえあった

の渡辺均氏らに感謝の言葉を述べたあとに言い放った。「また試合した〜い」。居合わせたWBA世界スーパーフェザー級チャンピオン・内山高志選手が慌てて制止した。「まあ少しは休めよ」

渡辺会長は「きちっとしたボクシングだった。何よりイイのが目。キラキラ輝いている。あとは経験」とタフな精神力を褒めた。

会計士ボクサーは一日休んで、20日から練習を再開した。次の試合はジム関係者によると「早くて3〜4か月後、女子は選手が限ら

れているから、試合交渉が難しい」という。

白星を目指す猛練習が、また始まった。



高木さんさんが表紙の「HAKUMON Chuo」2014年春号